

上村松園
マリー・ローランサン
三岸節子
片岡球子



はなやかに奏でる色彩の四重奏

カルテット

マリー・ローランサン 絵画教師たち 1929年 山王美術館寄託

山王美術館コレクションでつづる

女性画家たち展

2025年9月1日(月) ▶ 2026年1月31日(土)

- 【開館時間】 10時～17時（入館は16時30分まで）
【休館日】 火曜日・水曜日(但し9月23日は開館)、
年末年始(12月29日～1月2日)
【入館料】 一般 1,300円
大学・高校生 800円
中学生以下 500円(保護者同伴に限り2名様まで無料)

* 前売券・団体券はございません。
* 山王美術館は日時指定予約制ではありませんが、展示室が混雑し、
一定の人数をこえた場合には、入場制限をさせて頂く場合がございます。



山王美術館

SANNO ART MUSEUM

〒540-0001 大阪市中央区城見2丁目2番27号

【お問合せ】 06-6942-1117

<https://www.hotelmonterey.co.jp/sannomuseum>

JR「京橋」駅・京阪「京橋」駅・大阪メロ「大阪ビジネスパーク」駅より徒歩5分



山王美術館

SANNO ART MUSEUM

【展覧会概要】

山王美術館では2025年9月1日（月）より2026年1月31日（土）まで、「山王美術館コレクションでつづる 女性画家たち展」を開催します。

本展ではコレクションの中から、2025年に生誕150年を迎える上村松園（1875-1949）、生誕120年を迎える三岸節子（1905-1999）、同じく生誕120年を迎える片岡球子（1905-2008）、そして2026年に没後70年となるマリー・ローランサン（1883-1956）、以上4名の女性画家たちによる作品を一堂に展示致します。

2015年に国連で採択されたSDGs（持続可能な開発目標）、17ある目標の一つに「ジェンダー平等」が掲げられています。しかしながら採択より10年が経過した現在においてもジェンダーギャップの問題はなお多く残されています。

ましてや彼女たちが画家を目指した100年以上前、今より男性中心の社会であった美術界において、女性が高い志をもって画業を全うすることは大変困難でありました。そのような状況下でありながら、しなやかに逞しく生きた彼女たちの華やかかつ情熱的で個性あふれる作品は、現代を生きる私たちにもきっと勇気とエネルギーを与えてくれることでしょう。

山王美術館でしか出会うことのできない作品の数々をどうぞご覧ください。

- 【開催期間】 2025年9月1日（月）～2026年1月31日（土）
【開館時間】 10時～17時（最終入館16時30分）
【休館日】 火曜日、水曜日（但し9月23日は開館）、年末年始（12月29日～1月2日）
【入館料】 一般 1,300円、大学・高校生 800円、
中学生以下 500円（保護者同伴に限り2名様まで無料）

- 【お問い合わせ】 一般財団法人 山王美術館 学芸担当 大町啓介
〒540-0001 大阪府中央区城見2丁目2番27号
TEL 06-6942-1117 FAX 06-6942-8700
E-mail: k-ohmachi@hotelmonterey.co.jp
URL: <https://www.hotelmonterey.co.jp/sannomuseum/>

【展覧会のみどころ】

① ここでしか出会えない作品、女性画家4人の共演

山王美術館では、2009年のオープン以来、コレクションのみによる展覧会を開催してきました。他の美術館との作品の貸し借りは行っておらず、本展覧会で展示する作品の何れもが、「ここでしか出会えない芸術作品」です。

2025年は国連で「国際女性デー」が制定されて50年、日本では男女雇用機会均等法制定から40年を迎える年でもあります。当館ではこの節目にあたる年、コレクションの中より上村松園、マリー・ローランサン、三岸節子、片岡球子、4人の女性画家の作品を展示いたします。

② 上村松園「生誕150年」

1875年京都に生まれ、気品ある清澄な女性を描き続けた上村松園。本展覧会では上村松園生誕150年を記念し、新たにコレクションに加わった作品1点を含む、所蔵作品8点を全て展示致します。

③ 三岸節子「生誕120年」

1905年愛知県に生まれ、豊かな色彩と重厚な質感で花や風景を描き、女性洋画家の地位向上にも貢献した三岸節子。本展覧会では三岸節子生誕120年を記念し、新たにコレクションに加わった5点全てを初展示致します。

④ 片岡球子「生誕120年」

1905年札幌に生まれ、大胆な構図や鮮やかな色彩で、個性的な作品を描き続けた片岡球子。本展覧会では片岡球子生誕120年を記念し、代表的な作品である「富士山」、「面構（つらがまえ）」シリーズを含む作品23点を1フロアで展示致します。

⑤ マリー・ローランサン「没後70年」

パステルカラーの淡い色調とやわらかなタッチによる独自の画風で、日本でのファンも多いマリー・ローランサン。本展覧会では1956年にパリで亡くなったローランサンの没後70年を記念し、作品11点を展示致します。



【広報用画像①】
《美人納涼図》1916-1926年頃
山王美術館



【広報用画像②】
《よそおひ》1949年
山王美術館



上村 松園

Uemura Shoen

1875-1949

京都で葉茶屋を営む上村家の次女として生まれる。本名は津禰（つね）。父は松園の誕生を待たずに他界、家業を継いだ母により女手ひとつで育てられる。幼い頃より絵を好み、**1887年**京都府画学校（現・京都市立芸術大学）に入学、四条派の鈴木松年に師事する。翌年、松年の退職に伴い同校を退学し松年塾に入塾、松園と号す。**1893年**に幸野樗嶺に入門するが、樗嶺の死去に伴い、同門の先輩であった竹内栖鳳に学ぶ。**15歳**で第3回内国勧業博覧会出品作が一等褒状を得るとともに、来日中の英国王子コンノート殿下買い上げとなる。その後も国内外の博覧会で受賞を重ね、その実力を認められる。**1907年**の官展開設後は文展、帝展を代表する作家の一人として活躍。謡曲に着想を得た格調高い女性像や気品ある市井の女性を主題に、清澄な美人画を描き続けた。**1948年**、女性として初となる文化勲章を受章した。

初展示

【広報用画像③】
《美人観書》1941年頃、山王美術館

膝の上に書物を広げて読書する日本髪 of 若い女性。着物には桜の花、帯には胡蝶の模様が入っており、春の季節が表わされています。簪（かんざし）や櫛（くし）などの髪飾りも細やかに描き分けられています。松園は、単にきれいな女性を描くだけでなく、女性の美に対する理想や憧れを描き出したいという気持ちで、美人画を描き続けました。

マリー・ローランサン

Marie Laurencin
1883-1956

パリで婚外子として生まれ、裁縫の仕事をしていた母の手によって育てられる。画家になることを望み、1902年パリの画塾アカデミー・アンベールに入学、そこで出会ったブラックを通して、バトー・ラヴォワール（洗濯船）に住むピカソら前衛芸術家たちと親交を結ぶ。互いに影響を与えた詩人アポリネールとの破局を経て、1914年にドイツ人男爵と結婚。ドイツ国籍となったため第一次世界大戦時は中立国のスペインに亡命。戦後、1921年に単身パリへと帰還、翌年に離婚が成立しフランス国籍を回復する。帰国後に開催された個展が成功をおさめ、上流階級の婦人の間では彼女に肖像画を依頼することがステイタスとなる。1937年、フランス政府よりレジオン・ドヌール勲章を受章。パステルカラーの淡い色調とやわらかなタッチによる独自の画風で優美な女性を描き続けた。



【広報用画像④】
《真珠で装うエヴァリン》1936年
山王美術館



【広報用画像⑤】
《ピンクの花で装うマノーラ》1925年
山王美術館

【広報用画像⑥】
《道化師たち》1929年、山王美術館寄託

ピカソなど最先端の芸術家とのコラボレーションにより、当時のパリで絶大な人気を博していたロシア・バレエ団「バレエ・リュス」。1923年、ローランサンはバレエ「牝鹿」の舞台芸術と衣装のデザインを担当します。「牝鹿」の公演は大成功をおさめ、その後もたびたび舞台の仕事を手掛けるようになり、並行して舞踏や舞台美術をテーマとした油彩画も描きました。他にも版画制作や、本の挿絵を描き、詩をつくり、室内装飾や壁紙のデザインを手がけるなど、さまざまな分野で才能を発揮したローランサン。彼女は当時としては珍しい女性のマルチ・アーティストであったといえるでしょう。

三岸 節子

Migishi Setsuko
1905-1999



初展示

【広報用画像⑦】

《花（ヴェロンにて）》1978年

©MIGISHI、山王美術館

初展示

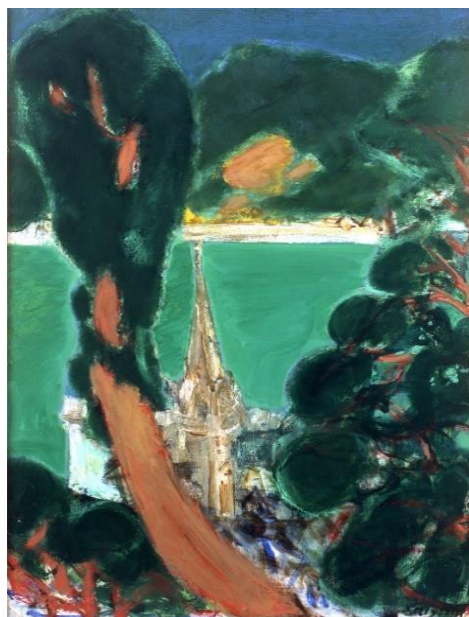
【広報用画像⑧】

《天草の入江》1956年頃

©MIGISHI、山王美術館

1956年、天草地域が雲仙国立公園に新しく指定され、雲仙天草国立公園へと名称変更されます。国立公園課より記念作品制作の依頼を受けた節子は、天草の崎津という漁村に滞在、地域のシンボルである教会と深みのある緑の世界が印象的な入江の風景を描きました。1954年から約1年のヨーロッパ滞在経験で、大いに刺激を受けた節子は、「色彩画家」としてさらなる一步を踏み出します。節子が描いた天草の崎津集落は、2018年「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」の構成資産として世界文化遺産に登録されました。

愛知県の大地主、吉田家の第六子として生まれる。名古屋の女学校在学中、実家が経営する織物工場が破産、一家の名誉を回復するため画家になることを決意する。1921年、親の反対を押し切り上京、岡田三郎助に師事し、1922年女子美術学校（現・女子美術大学）に編入する。1924年、当時新進気鋭の画家であった三岸好太郎と結婚、翌年に梅原龍三郎らが結成した春陽会に初出品し、女性初の入選を果たす。1934年に好太郎と死別、3人の子どもを抱えながら制作を続け、画壇での地位を徐々に確立する。1954年に初渡仏、帰国後は軽井沢や神奈川県大磯の山荘で風景画に取り組む。1968年に再び渡仏、南仏カーニュからブルゴーニュ地方ヴェロンに移住、20年余りをヨーロッパで過ごした。1994年、女性洋画家として初の文化功労者となる。豊かな色彩と重厚なマチエールが特徴で、生涯にわたって花をモチーフにした作品を多く描いた。



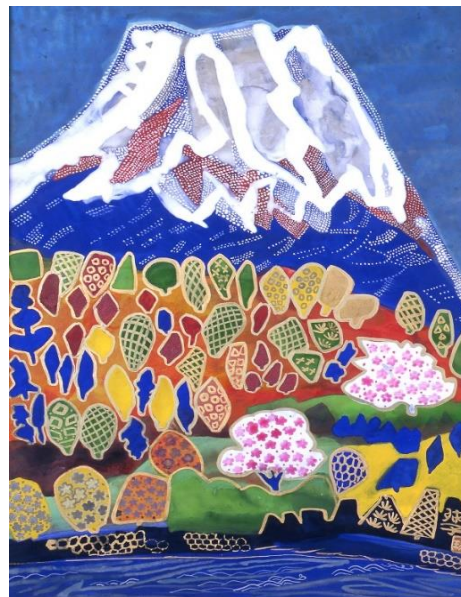


初展示

【広報用画像⑨】

《面構十三人衆内 写楽》1978年、山王美術館寄託

江戸時代中期、大胆な構図の役者絵で鮮烈にデビューを飾り、わずか10ヵ月と短い期間で、忽然と姿を消した謎の浮世絵師、東洲斎写楽。球子は写楽の作品から得たイメージをもとに、綿密な調査とユニークな設定による独自の解釈で、絵師の姿を描きました。背後には役者絵も一緒に描かれ、画面に活気を与えています。



初展示

【広報用画像⑩】

《花咲く富士》1985年、山王美術館寄託

古来より霊峰と崇められ、多くの偉大な先達を取り組んだ富士山。白扇を逆さまにすればよいのだから簡単に描けると思っていた球子でしたが、富士の高さも奥行きも出せず深く悩み、骨を埋めるまで描こうと決意します。球子が描いた富士は、日本の精神の象徴としてではなく、庶民の生活に寄り添った生命感あふれる富士山でした。

片岡 球子

Kataoka Tamako

1905-2008

札幌で醸造業を営む片岡家の長女として生まれる。札幌高等女学校にて医者を目指し勉学に励んでいたが、親友の一言で画家を志すようになる。1923年に上京、伯母の家に下宿し女子美術学校（現・女子美術大学）に入学。卒業後は婚約者との縁談を破棄し、画家の道を進むことを決意、自活のため横浜の小学校で30年にわたり教鞭をとるかたわら創作活動が続ける。1930年再興院展に初入選、以後院展を中心に活動し、日本画家としての地位を確立する。母校の女子美術大学講師を経て、1966年、同年開学した愛知県立芸術大学主任教授に就任、歴史上の人物を主題として取り組んだ「面構（つらがまえ）」シリーズはライフワークとなる。大胆な構図や鮮やかな色彩で、富士山などをテーマにした作品をエネルギーに描いた。1989年、女性日本画家として上村松園、小倉遊亀に続いて3人目となる文化勲章を受章した。

広報画像に関するご案内

このプレスリリースに掲載されている広報用画像①～⑩につきましては、画像データを プレス掲載用にご用意しております。また読者プレゼント用招待券も用意しております。「広報用画像使用申込書」に必要事項をご記入の上、FAX またはe-mailにてご連絡ください。

なお、「三岸節子」「片岡球子」の作品（広報用画像⑦～⑩）は著作権保護期間中につき、ご掲載にあたり、下記についてご注意ください。

○全画面使用、文字乗せ、トリミング無し

○三岸節子作品（広報用画像⑦、⑧）は”©MIGISHI”のクレジットを画像近くに明記

「ARTPR 展覧会情報」からも、
広報用画像の申請・ダウンロードが
できるようになりました。
下記URLもしくは右のQRコードから
お申し込みください。



<https://www.artpr.jp/sannomuseum/women-artists2025>

【プレスリリースに関する問い合わせ】

一般財団法人 山王美術館 学芸担当 大町啓介

〒540-0001 大阪市中央区城見2丁目2番27号

TEL 06-6942-1117 FAX 06-6942-8700

E-mail: k-ohmachi@hotelmonterey.co.jp

URL: <https://www.hotelmonterey.co.jp/sannomuseum/>